

日本人が喉歌について私に再び「気づかせて」 くれたこと

マリーナ・モンゲーシュ（国立民族学博物館外来研究員）

2007年、客員教授としてスラブ研究センターに3ヵ月過ごすことができるという幸運を手にすることができた。この滞在はすべての面で非常に成果のあるものであり、多くの知見を得られたものであった。ロシアに帰国するに当たり、多くをやり遂げたという気持ちと、あっという間に終わってしまったという残念な気持ちが共存した。

成田に到着したが、数時間到着が遅れたため、ホテルをあてがわれた。その日は小雨が降っていた。ホテルの部屋で雨が窓ガラスで気まぐれに形を変えて流れてゆくのを見ていた。突然、「私は日本に帰ってくる」という考えがひらめいた。文字通り「そうなるのだ」と考えが心の中で確信にかわっていくのを感じた。我々トウバ人にとって、雨は良いことが起こる兆候であり、雨のざわめきの中で起こる考えは現実と縁のないものではないと考えられている。

予感は裏切らなかった。こうして私はまた大好きな日本にいる、今回は大阪の民族学博物館に。関西空港に着陸したときも小雨だった。まるで去った時の雨が降り続けていたかのよう。民博の小長谷有紀教授は数日後に女性喉歌アンサンブル「トゥバクィズィ（トゥバの娘たち）」のコンサートがあると教えてくれた。実際、同郷人の写真が載った広告がいたるところに貼られていた。



国立民族学博物館での「トゥバクィズィ」の公演

アジア諸民族の文化を研究する人類学者として私は喉歌を次のように考えている。音楽の特殊なジャンルとして、喉歌は中央アジアの文化歴史的な領域の中のサヤン＝アルタイ山脈地域にいる数少ない人々、トヴァ人、ハカス人、アルタイ人、モンゴル人といった人々、地域的にはこれらの諸民族の場所を超えたところにいるバシキール人、唱法は初期的な段階にとどまっているもののヤクート人やブリヤート人といった人々の間に広まっている。しかしこの中でトヴァ

人だけが多様で豊かなスタイルを有し、精神文化とも密接かつ有機的に結びついて、最も完全な形で伝統を保持している。科学的な研究対象として喉歌、ホーメイ（ホーミーともいう）はなにより発声が独特で独自であることから注目を集めてきた。ホーメイジ（ホーメイ歌手）は歌う時に同時に二つの音を出し、一つの音は聴く人に何か楽器が演奏されているように聞こえる、実際は人間の咽頭から出ている音である。

伝統的にホーメイは男性の歌うものと考えられ、男性の大胆さやよき男の精神の象徴であった。牧民、馬飼、トナカイ飼、猟師、独身者、女たらしの歌とよばれるものが同じジャンルに属する。状況により、イギル（二弦の胡弓のような楽器）、ショール（たて笛）、ドプシュール（二弦あるいは三弦撥弦楽器）、ブザーンチュ（四弦の擦弦楽器）、ホムス（口琴）伴奏つきで演奏されることもあるし、伴奏がないときもある。

トヴァ人は、喉歌のスタイルが1、2しかないほかの民族と違い8つの唱法がある ホーメ

イ（高い音のでる喉歌）、カルグラ（低音の喉歌）、スグット（口笛を語源とする、高い音のでる喉歌）、ボルバン（喉歌をトリルのように揺らす）、エゼンギ（喉歌をギャロップのように揺らす）、フンザト（仏教寺院のリードを取る僧侶風の歌唱法）、ホブ・カルグラージ（草原の叫びと呼ばれる喉を緊張させ高い音を出す歌唱法）とソグ・カルグラージ（合唱あるいは対話的な歌唱法）

しかしのちにホームイは大衆のすべての階層が使うことができる世俗的な芸能となった。現在、そのような状況になっている。また伝統的に男性の芸能であったが、予期せぬことに「女性の顔」も持つようになった。1998年、最初の女性アンサンブル「トゥバクィズィ」が結成された。その登場はフナシタルオール・オオルジャク（1932-1993）という有名な喉歌歌手と結びついている。女性の喉歌アンサンブルを作るというアイデアは彼が出したものである。彼は発声方法からレパートリーまで未来のホームイ歌手の相談役であった。

1998年トヴァの首都クズル市で行われた「ホームイ」の国際シンポジウムが「トゥバクィズィ」アンサンブルのデビューの場でありトヴァの音楽シーンにおけるセンセーションとなった。女性ホームイ歌手たちの最初の公共の場でのコンサートはプロの音楽家や一連の愛好家の間で非常に相反した反応が見られた。あるものは聴きほれ、別のものは驚き憤慨し、またあるものは女性歌手のホームイをまったく受け入れなかった。しかし、時がたつにつれて、アンサンブルは実力があることを証明した。今日「トゥバクィズィ」はロシアや海外で男性の「喉の猛者たち」の技に劣らぬ成功を収めた。批評家たちのみとめるところによれば、アンサンブルはレパートリーの独自性や声の独特さ、そしておそらく高い芸術的な潜在性を持つ点で違っているという。

こうして、「トゥバクィズィ」を初めて、それも日本で聴くことになった、というのもトヴァでは様々な理由で彼らのパフォーマンスを見ることはできなかった。コンサートは小長谷有紀教授と音楽家巻上公一によって組織されたものであった。正直なところ不安であった。なにしろ私の同郷人はステージで日本人には全く分からないトヴァ語で歌ったのだから。日本の人々が私たちの喉歌を受け入れるとは思わなかった。見てみるとコールに座っている大部分の人が目を



楽屋での出会い

つぶったままコンサートを聴いている。最初、残念、この歌がわからないのだと思ったが、後で彼らが拍手しているのを見て彼らにとって親しみのあるものなのだと理解した。

小長谷有紀教授と巻上公一さんは強い熱意をもってコンサートを組織し、アンサンブルのコンサートに温かく心のこもったコメントをしてくれたので、私にとりついてきた不安はどこかへ行ってしまった。また、喉歌をまったく違う形で理解できるようになった。トヴァで喉歌が私にとって普通のものだとすれば、ここでは喉歌がまさに人々に呪文をかけているのだと。女性たちは素晴らしい声で歌い、その声は虹の色のように注がれるのだと。ホールは敏感に彼女らの歌声に反応していた。やはり現代芸術には言葉の壁はないのだ。

コンサートの後、小長谷先生は満足した顔で同郷の彼女たちと話す機会を与えてくれた。私が民博の外来研究員としてしていると知り、彼女たちはおどろいていた。私にとっては日本の

ホームー歌手の話を知り、彼女たちから聞いたのが興味深かった。彼女たちの日本でのプロデューサーの巻上公一氏は、日本にトゥバの喉歌を広めることに大変貢献した人である。彼は日本トゥバ「ホームイジ（ホームイ歌手）」協会を設立している。輝かしい組織者である巻上氏は頻りにトゥバのアーティストを日本に招いてコンサートツアーなどを開催し、定期的に「ホームイ」コンクールを催している。変わらず彼をサポートしているのは彼同様に喉歌が大好きな妻のアヤコさんである。彼らが一緒に行った活動のおかげで多くの日本人がトゥバの音楽文化を知ることができたのである。

また、巻上公一自身もトゥバ人に負けぬ喉歌を披露する。日本には彼らの弟子もおり、喉歌を教えている。最近では女性も多くおり、しばしば男性よりもうまく習得しているとのこと。

等々力政彦氏も有名な喉歌歌手である。有名な音楽ユニット「タルバガン（モンゴルのマーモット）」を同じく喉歌歌手の嵯峨治彦氏と結成した。彼らのデュオは日本でもツアーを成功させ、海外でも国際音楽コンクールやフェスティバルで精力的に活動している。また、彼らはアルバムをいくつか発表している。等々力氏は「トゥバ友の会」というサイトも運営している。彼のところにはトゥバ音楽好きが集まる。1998年彼らのユニット「タルバガン」はクズルで行われた「ホームイ」コンクールで第2位となったことは外国人音楽家がトゥバの名人たちと極めて難しい音楽のジャンルで肩を並べることができることの証明である。

テラダ・マオは劣らず有名な喉歌歌手である。東大で日本語、日本文学を学んだ彼女は巻上公一をはじめとした日本の喉歌歌手とともに1998年トゥバに最初を訪れた。この旅行が若い日本女性のその後の運命をほぼ決めた。しばらくして彼女は大好きなトゥバに戻り、現在、喉歌を学んでいる。

「トゥバクィズィ」アンサンブルは日本でのツアーを成功裏に行っている時、テラダ・マオはその名人芸でトゥバの観客を驚かせていた。彼女は「ホームイ」コンクールで2004年と2008年と2度「観客共感賞」を授与されている。2004年、アルタイ共和国の語り部国際コンクールの喉歌部門でも第二位となった。2007年には喉歌のカルグラ部門で優秀賞を授与されている。

民博でのトゥバと日本の喉歌歌手たちとの出会いは大きな出来事であった。ホームイは私にとって今までは普通のものだったが、突然、まったく違う世界を見せてくれた。今日喉歌は民族的なものではなく、国際的なものなのだと目に見える形で納得させられた。

(ロシア語より荒井幸康訳)